

ボーイズラブによって 攪乱／固定化されるジェンダー構造： フェミニズムの視点から考えるボーイズラブの可能性

大 橋 稔

はじめに

女性の欲望が生み出した文化現象の一つに、ボーイズラブ（以下 BL と表記）がある。91年に創刊された『イマージュ』の表紙に Boy's Love Comic という見出しが登場し、94年、漫画情報誌にボーイズラブという言葉が使われたのがその始まりだとされている。その後、ボーイズラブは BL と略して用いられるようになった。BL と括られる作品群であるが、その示す範囲は非常に広い。本稿では漫画作品のみを取り上げるが、小説やゲームもある。その漫画や小説を原作にした映画や、オリジナル・ヴィジュアル・アニメ（OVA）、人気声優を起用したドラマ CD もある。またオリジナルに制作された映画もあれば、TV アニメ化や TV ドラマ化された BL もある。視聴者の獲得を狙い、一般的なドラマや映画においても BL 的な演出を取り入れたものが制作されるようになっている。

また読者に目を向ければ、BL を愛好する読者には「腐女子」や「貴腐人」などの呼び名が定着している。性表現を含む BL の読者や愛好家が、隠され不可視化された存在とされるのではなく、一定程度の集団としてその存

在が認識されるようになっていのである。さらにBLの愛好家は日本にとどまらず、世界にも広がっている。海外で開催されるコミックマーケットは常に盛況だと言われている。また男性のBL愛好家も登場しており、2016年には男性向けBL入門書として『俺たちのBL論』が出版され、雑誌『ダ・ヴィンチ』（2017年3月号）では、「男のためのBL」という特集が組まれた。女性の欲望が生み出したBLという文化現象は、性別を越えて浸透しているのだ。出版業界が低迷していると言われるなか、BLだけは活況を示している状況が、BLの境界線を越えた人気の広がり証左だとも言えるだろう。

本稿はこのBLが何を意味しているのか、そして女性学やフェミニズム的な視点からBLに接近をした場合、何が見えてくるのかを探るものである。BLの存在に初めて触れた時、BLの存在がさらに顕在化したり、社会に浸透したりすることで、男性同性愛の存在を可視化させることにつながり、異性愛の男性を頂点とするジェンダー構造に揺さぶりをかけるのではないかと漠然と考えていた。その問題意識が正しかったのか否かを検証しようというのが本稿の試みである。

BLを巡っては様々な研究がなされている。『ユリイカ』では2007年6月臨時増刊号と2012年12月号でBLに関する特集が企画され、『美術手帖』は2014年12月号でBLを特集した。またフェミニズムの観点からの研究としては、堀あきこが『欲望のコード』（2009年）の一部で〈やおい〉を取り上げ、読者が個別の登場人物ではなく男性集団の関係性に視点を向ける特殊性を指摘し（140）、東園子も『宝塚・やおい、愛の読み替え』（2015年）の一部で〈やおい〉を分析し、社会で通用している意味を変換し新たな何かを想像／創造する行為だとしている（286）。西村マリは『BLカルチャー論』（2015年）において、男らしい／男らしくないという階層的な二項対立を内側から脱臼させるBLの可能性について言及した（215）。また溝口彰子は『BL進化論』（2015年）において、BLは女性たちが女性としての自分から逃避し

ラブとセックスを楽しむための物語群であり（254）、また愛好家女性が交歓するコミュニティでありフォーラムだとしている（255）。このような先行研究を受け、本稿ではBLがジェンダー構造とどのような関係があり、フェミニズムや女性学の視点から希望となり得るのか否か、つまりジェンダー構造や女性抑圧のシステムを攪乱し得るのか否かを考察することにする。

I. ボーイズラブの源流

男性同士の性行為を含む恋愛が漫画で描かれるようになるのは、BLが最初であったわけではない。西村は『BLカルチャー論』において、BLの源流の一つとして24年組の〈少年愛漫画〉の存在を指摘している（21）。24年組とは、1970年代に頭角を現し、少女漫画に画期的な影響を与えた漫画家たちであり、SFやファンタジー的な要素を含んだ作品を描いた。またコマ割りなどの画面構造を複雑化させるなど、技術的な側面においても大きな影響を与えた。彼女たちの多くは、少年を主人公にした少女漫画を描き、その一つとして少年同士の恋愛が描かれた。

24年組の一人である竹宮恵子は1976年、『風と木の詩』の連載を開始する。この作品は、少年同士の恋愛を描いた〈少年愛漫画〉と分類されるが、特に当時としては過激な性描写に挑戦したことで話題となった。このような挑戦をしたことについて竹宮は、「ベッドの上に男女の足を3本描いただけで警察に呼ばれ、作品は世に出せなかった。でも不思議なことに、男性同士なら問題にならなかった」（2015年1月5日）、「男女のベッドシーンは描けなかった。同じ想像なら男同士だっていいじゃないか、と。少年は自分とは違うからこそ描ける」（2015年2月2日）、と語っている。つまり、『風と木の詩』で描かれるのは美少年の恋愛や性愛を含んだ関係であるが、そこで竹宮が表現しようとしたのは、女性の衝動であり、欲望だったのである。

BLの源流として想起されるもう一つの源流は、〈やおい〉の存在である。〈やおい〉の定義に関しては、「やまなし、意味なし、おちなし」な作品とする一応の定義はあるものの、時代や論者によってその指し示す内容が多義的な概念である。BLの源流として捉えられることもあれば、両者を同一のものとして捉える論者も居る。また同じように男性同士の性愛を扱うが、両者はまったく異なるものだとする論者も居る。

サンキュータツオは『俺たちのBL論』で、BLと〈やおい〉をまったく別のものとして論じているが、両者の違いについて下記の通り説明する。

「BL」というのは「第一次原作に男性同士の恋愛が描かれているものの」。

「やおい」というのは「第一次原作には描かれていないものの、キャラクター同士の恋愛を読み込む精神活動や創作活動」だということです。
(20)

本稿では彼の論を採用し、BLを一次原作とし、〈やおい〉は二次創作として扱うことにする。

24年組によって描かれた〈少年愛漫画〉。しかしそこでは描き切られていない登場人物同士の関係が、読者の妄想として性的な関係を含めて〈やおい〉では創作されたのである。このような二次創作活動の興隆を支えたのは、1975年に第一回が開催されたコミックマーケットだった。コミックマーケットで当初取り扱われていたのは、〈少年愛漫画〉のパロディーなどの二次創作が主流だったが、次第に一次原作となる作品の人気も広がりを見せるようになった。

〈やおい〉制作の背景には、人気少年漫画のTVアニメ化の影響があったことも見逃せない。少年漫画、少女漫画と呼ばれる分類が存在する日本にお

いて、漫画の読者は性別や年齢によって分離させられていた。しかし人気少年漫画がTVアニメ化されることによって、その視聴者は性別の垣根を越えることになった。そして少女たちは、少年漫画という空間のなかで描かれた、女性が周縁化あるいは排除された男性のみの世界の中に男性同士の絆を発見し、そこに恋愛の要素を妄想するようになったのである。この妄想が〈やおい〉を生み出すことになったのだ。

このような〈少年愛漫画〉と〈やおい〉という流れの中から、「女性による女性のための男同士のラブストーリー。性描写アリ」（西村、11）の一次創作としてのBLが登場することになった。1990年創刊の『GUST』、1991年には『イマージュ』『b-boy』が創刊されるなど1990年代に入ると、商業的なBL雑誌があいついで創刊されるようになった。このことから、BLという分野の登場は1990年代以降とされている。しかし西村は、1989年に少女漫画誌である『マーガレット』に尾崎南が『絶愛—1989—』の連載を開始したことに、BLの黎明を求めている。人気少年漫画『キャプテン翼』⁽¹⁾の同人活動（二次創作）を行っていた尾崎が、商業誌において一次創作である『絶愛—1989—』の連載を開始したことを考えると、西村の評価は妥当であるように思われる。

このように〈少年愛漫画〉と〈やおい〉を二つの源流として誕生したBLという表現は、基本的に男性同士の恋愛を描いていた。しかし男性同士の絆を性愛を含めた関係として描くという行為の裏には、女性の姿のままでは描くことができなかつた女性の性的衝動を含めた欲望が隠されていた。さらにBL執筆の動機には、女性が排除された社会であるために妄想するしかなかった、男性社会に対する女性の妄想が存在していた。BLの源流を確認することによって、BLが女性の欲望や妄想に基づく表現であることが明らかになり、それはBLが、フェミニズムや女性学的な観点からの分析対象になり得ることを示している。

Ⅱ. ボーイズラブの典型

BLの設定には、典型的な型が存在しているようだ。この典型について、西村は「王道」と呼び、溝口は『BL進化論』において「定型」と呼んでいる。溝口はBLにおける定型について

美男子×美男子

男性的な〈攻〉×女性的な〈受〉というキャラクター設定

〈受〉キャラの男性性と女性性のせめぎあい

〈攻〉が金持ちだという設定

美貌だけでなく才能もあるが、欲望に流されやすいという〈受〉キャラの設定

男性主人公が二人とも女性にもてる設定（24-25頁を参照した）⁽²⁾

と説明している。さらに西村は、〈受〉キャラが貧困などの恵まれない状況に設定されていることを指摘し、〈攻〉〈受〉間に経済的、あるいは社会的な格差が存在していることもBLの典型的な特徴だと説明する。つまり、格差を乗り越えて真実の愛に辿り着くシンデレラストoryが、BLの典型的な物語展開となっているのだ。

しかしこのような典型的な物語形式を伴って1989年に登場したBLだったが、2000年代に入ると、その様子に変化が生じる。つまりBLの「王道」や「定型」に収まりきれない多種多様な物語が登場するようになったのである。この王道にはまらないBLを溝口や西村は「進化系BL」と呼んでいる。この進化の方向性は様々であり、それに加えて定型的なBLもまた描き続けられていることによって、今日のBLは様々な男性同士の関係性を妄想し、描いていることになる。

進化系 BL の変化の一つとして、王道においては圧倒的な富と権力を有する〈攻〉、あるいは社会的に弱者であることが仄めかされる〈受〉という、両者の関係性や役割においてある程度固定化されていたキャラクター設定の流動化がある。この変化の結果として進化形 BL では、様々な〈攻〉〈受〉の関係性が描かれることが可能になった。例えば、ヤクザの若頭という権力を持ちながら〈受〉であったり、部下という社会的な上下関係においては下位に位置しながら〈攻〉であったり、公的空間での関係性と、私的空間での関係性においてねじれが生じる作品が描かれるようになったのだ⁽³⁾。このような社会的な上下関係と〈攻〉〈受〉という関係のねじれは、〈下克上〉と呼ばれ、一つの独立したカテゴリーとして存在している。

さらに〈攻〉〈受〉間の圧倒的な力の差は、BL の世界を非現実的なものにする効果を果たしていたわけだが、その効果を取り去ることによって BL の世界はより現実に近い世界として描かれることになった。〈少年愛漫画〉が、女性の欲望を描くために女性が排除された非現実的な世界を設定しなければならなかったのに対し、進化形 BL ではより現実的な世界設定において女性の欲望を表現することが可能になったと考えることができるだろう。

このような進化の背景には、BL というジャンルの可視化、「腐女子」「貴腐人」などと呼ばれる読者の顕在化、さらにはインターネットや携帯デバイスの進化による発表媒体の多様化などの影響があったことも看過することはできないだろう⁽⁴⁾。

Ⅲ. 作品分析

以上のような BL における典型と進化系の大筋を確認したうえで、以下では具体的な作品を概観することにする。具体的な作品を見ることで、王道の BL 物語の特徴と BL の進化について確認しておきたい。ここで取り上げる

作品は、ヨネダコウ「どうしても触れたくない」(2008年)、柊のぞむ「どっちもどっち」(2011年～)、大魚 YUKKA「高嶺のドクターの知られざる素顔」(2012年)の三作品である。それぞれ王道、進化系の要素を含んだ作品であるのと同時に、いずれの作品も実写化されているという点で共通している。BL 作品の漫画や小説を原作として実写映画化されたり、アニメーション化されたりするのは、進化系 BL の時代の特徴の一つと言える⁽⁵⁾。

1. 大魚 YUKKA「高嶺のドクターの知られざる素顔」

さて最初に取り上げるのは、大魚の「高嶺のドクターの知られざる素顔」である。この作品は、大魚の同名の単行本に収められた一話読み切りの書下ろしである。紹介文には次のように記されている。

岡安総合病院の跡取り息子の大賀は、
 渡米して磨いたオペの腕を持つエリート医師。
 ルックスもとびきりで、当然院内でも人気ナンバーワン！
 ある日、大賀の自宅に届け物を頼まれた看護助手の奈々夫は、
 そのベールにおおわれた私生活を覗き見てしまい……。
 全てに恵まれた完璧男の意外な素顔が
 世話好き男子の母性本能をくすぐる！?
 白衣の王子様とのシークレット・ラブアフェア♡（裏表紙より）

この紹介文から、登場人物の関係性が明らかになる。舞台として設定されているのは、岡安総合病院とその跡取り息子である岡安大賀の自宅マンションである。つまり舞台は、〈攻〉である岡安にとっては私的空間そのものであり、跡取りという絶大的な権力を行使することが可能な空間として設定されている。もう一方の登場人物である池内奈々夫は、この岡安総合病院で働

く看護助手という設定である。つまり病院という職場における権力関係において、〈受〉である池内は最底辺に近い位置づけとなる。この物語で岡安と池内は、権力格差、経済格差を越えた恋愛関係を築くことになることが示されているのだ。

さらに本編を見ていくと、二人に向けられる女性の視線が描かれる。まず岡安について看護師は、「あーん岡安先生」「今日は一段とス・テ・キ♡」「昨日のオベ すごかった らしいわよ」「あたしも 先生の汗 拭きたあい♡」(13)などと語っている。そして彼を語る看護師たちの眼はハートで表現されている。一方池内の場合は、「最近 奈々くん ウキウキじゃない?」「女でもできたか ちょっと 狙ってたのに」(18)や、「やっぱり林くん 奈々ちゃんに任せて 正解だったね」「本当 面倒見るの上手よねー」「見てホラ もう懐いてる」(29)と看護師が語っている。つまり岡安、池内は共に、仕事の出来る有能な人材であり、女性から人気があり、もてる存在として設定されていることが明らかになる。

紹介文にある通り、仕事帰りに岡安の家に届け物を頼まれた池内は、散らかり放題の岡安の自宅を目の当たりにする。そして「世話好き男子」である池内は岡安の家を掃除することになる。このことがきっかけとなって池内は岡安に頼まれるようになり、食事の準備や部屋の掃除など岡安の世話を甲斐甲斐しくすることになる。職場ではエリート医師の岡安であったが、私生活では自身の身の回りの世話も出来ないダメ人間だったのである。

そんな生活の中で池内は、コンビニ弁当や外食ばかりだという乱れた岡安の食生活を知り、「オレだったら もっと栄養のある物 作れるのに…」(16)と考えるが、とっさに「——て 今 何考えた!？」(17)とその考えを打ち消そうとする。また岡安の世話をすることについて「そりゃ ちょっとは 役得かなあとは 思っているけど」「ああ 悲しい性」(16)「ホントに なにやっぺんだろ オレ…」(17)などと、自問自答する姿が描かれる。

このようにみると、「高嶺のドクターの知られざる素顔」が王道と呼ばれる設定を忠実に用いた作品であることがわかる。岡安はエリート医師というまさに男らしさの象徴を持った存在であり、池内については言えば甲斐甲斐しく誰かの世話をするという女性的な特性を持った存在として描かれている。その一方で池内は、岡安との関係性において発露する女性的な部分を否定しようとしたり、自己嫌悪したりと、女性性とせめぎ合っている様子も伺える。また岡安については、総合病院の跡取りという立場からも明らかではあるが、「明日 ほかにいる物が あればなんでも 買ってきて」(17) と言ってクレジットカードを渡せるほどに裕福な境遇である。

さらには女性看護師たちが二人に向けている視線から分かる通り、女性からもてるキャラクターとして設定されている。池内の場合で言えば、「世話好き男子」であるため、女性からだけではなく男性の後輩や患者など、老若男女を問わず周囲からの信頼が厚い。「患者さんが 奈々夫くんが いいって理由がわかるよ」(20) というのが、岡安が池内を選んだ理由ともなっている。このように「高嶺のドクターの知られざる素顔」は、溝口や西村が指摘したBLの典型を網羅した物語だと言える。

最後に、王道設定の中でまだ言及していない〈受〉の欲望に流されやすいという設定について言及しておきたい。この場面は、物語が大きく動き出す重要な場面でもある。池内はシーツを取り換えようとして岡安の寝室を訪れる。ベッドでは疲れた岡安が、布団をかけずに寝ていた。池内は岡安に布団に入るように促すが、返答はない。それどころか、寝ぼけた岡安は池内に抱きつき、離そうとしない。好意を寄せる岡安の寝顔を間近にした池内は、「ちょっと…だけ」(24) と思いながら、キスをしてしまう。その時、目覚めた岡安は戸惑い、「奈々夫くん？」(24) 「——俺が 勘違いさせたのかも しれないな」「そういう つもりはないんだ」(25) と告げる。良好な関係を築いていた二人だったが、決して恋愛関係にあったわけではない。そして岡安

には「そのつもり」がないことが明らかになった場面であり、二人はその後距離を置くようになるのだ。

互いの気持ちが明らかとなり、そこに乖離があることを同時に理解するこの場面は、二人がハッピーエンドへ向かうためには、つまり二人の想いが重なりカップルとして成立するためには避けることが出来ない課題を明示する役割を果たしている。そしてその場面を演出するために採用されたのが、欲望に流されやすい〈受〉というBLの王道設定だったのだ。池内に欲望を抑制する力があれば、二人の想いの乖離を岡安が知ることもなく、さらにはこの後に訪れる別れと、それを乗り越えた後に訪れるハッピーエンドもなかったことになる。職場の外においては全く鈍感で、ダメ人間である岡安に、池内の秘めた想いを理解させるという目的を自然に達成するために、BL王道における〈受〉のキャラクター設定が効果的に、そして自然に利用されていたのだと言える。

「高嶺のドクターの知られざる素顔」は、2012年という進化系BLの時代になってから描かれた作品であるが、王道と呼ばれる物語設定を下敷きにした作品であり、進化系BLが王道BLを駆逐したのではなく、BLの一つの種類にしたことを示していると言える。

2. 柊のぞむ「どっちもどっち」

柊のぞむの「どっちもどっち」は、『GUSH』に2009年10月号より不定期に掲載されている作品である。現在も掲載は続いており、コミックとしては現在第6巻まで刊行されている。また単行本化されるにはあたっては、『GUSH』誌上で発表された作品のほかにも、書下ろしの「どっちもどっち」や、「どっちもどっち」以外の作品が含まれていたりする。本稿では第1巻を中心に分析したい。第1巻の紹介文は以下の通りである。

とある企業のツインタワー…

それぞれの棟には女子社員の人気を二分するトップエリートがいる。

自称スーパーフェロモン男の尾崎と、

帰国子女で才能に溢れた王子様の存在・円谷。

二人は同じ会社のライバル同士。

そんな二人がベッドを共にする事に！

…でも、どちらが上でどちらが下!?

攻×攻のプライドをかけた闘い勃発!! (裏表紙より)

さてここで着目したいのは、尾崎と円谷の二人は共に会社のトップエリートであり、ライバル同士であると設定されていることだ。典型的なBLの物語においては、カップルの間には格差が必要であり、その上下関係によって〈攻〉と〈受〉が固定されていた。しかしこの物語においては、格差が解消されている。そのため二人の関係性は、「攻×攻のプライドをかけた闘い」と表現される通り私的空間においても、どちらが〈攻〉として優位に立つのかを争うライバルとして設定されることになる。つまり、社会的な関係性がそのまま私的な空間の関係性にも持ち込まれていることになるのだ。

本編では、尾崎と円谷のプロフィールがもう少し詳しく示されている。まず尾崎については、「B棟 尾崎 名門大学を卒業後 スポーツ界で 数知れない程の賞を 総ナメにし その眩しい肉体美で いわゆる目が合うだけで 妊娠すると噂される スーパーフェロモン男」(7)と紹介されている。一方、円谷の場合は、「A棟 円谷 幼い頃から 世界中を飛び回り 話せない言葉などなく ピアノ、バイオリン その他聞いたこともない 楽器も操り放題の 王子的存在」(7)だという。さらに二人が勤めているのは、「都内 某大手企業の本社 ツインタワービル」(7)であり、そこはエリートのみが勤める場所で、それぞれの棟を二人が牛耳っていると説明されている。

このプロフィールから分かるのは、尾崎も円谷も共にエリートという特権的な立場に位置づけられていることだ。さらにその特権的な優位性は、それぞれが才能豊かな存在だとされることで、より確かなものとされる。また二人の勤務先が都内にツインタワーを有することが可能な大手企業であるという設定は、二人がそれなりの高給取りであること、そして独身でもあるため経済的に余裕のある生活をしていることを仄めかすことになる。実際、物語で何度か描かれた尾崎の自宅は、高級マンションである。

さらに女子社員は二人を見て、「尾崎さんと 円谷さんが一緒に いらっしゃるわ——!!」「ステキー!!!」「は●れメタルが二匹もっっ」「キセキ」「こっち見て」(9)と騒ぎ、顔を赤らめて失神してしまっている。このことから、二人が女性にもてる存在とされていることは明らかである。二人の人気は、女性社員に限らず性別や世代を超えたものとしても描かれている。例えば、円谷は社長秘書をしているわけだが、その社長は円谷に好意を持っているし、取引先の社長や会長の娘からも好意を寄せられている。尾崎の上司である部長も尾崎に対して女子社員同様に好意を寄せている(社長や部長の好意に性的なニュアンスは含まれていないが)。また第3巻「第三のイケメン」では尾崎を慕う大学の後輩が彼と同じ職場に転職し、円谷を含めて三角関係になる話が描かれている。

このように考えると、尾崎と円谷は共にBLの王道物語に登場する〈攻〉の属性を兼ね備えたキャラクターであることが分かる。そして二人が〈攻〉という立場を巡ってプライドをかけて闘わなければならないのは、自らの優位性を保つためだったと言える。王道BLにおいて〈攻〉〈受〉という関係性は固定化された関係であり、そこに流動性は存在しない。つまり一度〈受〉と相手に見なされることは、二人の力関係において劣位に置かれ、そこに固定されることを意味するのだ。だから二人は、〈受〉と見做されることを何としても回避しなければならないのであった。また権力関係において

劣位におかれることは、女性化されることと同義でもあった。尾崎も円谷も共に、〈攻〉の位置をとるとき、〈受〉となる相手を「美人」「可愛い」などと女性的なイメージで表現している。このことは〈受〉化されることは女性化されることであることを端的に示している⁽⁶⁾。

作者は尾崎と円谷の間に発生している闘いの意味について全く言及してはいない。しかし読者は、尾崎と円谷の間に生じている闘いが、二人の権力関係や上下関係を位置づける闘いであり、自らの優位性を保つための闘いであったことを、違和感を抱くことなく読み取ることができている。なぜなら読者は、王道というBLの物語の典型が存在していることを理解し、それを下敷きとしながら読み解いているからだ。つまりBLの王道という設定が、作者のみならず読者にも共有されているのだ。

「どっちもどっち」の尾崎と円谷の関係性を読み解くことによって、〈攻〉×〈攻〉という関係性で成立するこの物語は、典型的なBLの物語設定から逸脱したものであることが明らかになった。つまりこの物語は、進化系BLに属する作品である。〈攻〉×〈攻〉という関係性は、BL進化系では好んで描かれる関係性でもある。また二人の闘いの意味を読者が理解するという観点から考えると、〈攻〉×〈攻〉の関係性が進化系として成立し得るのは、王道というプロットが作者と読者によって共有されているためであることも同時に明らかになる。

3. ヨネダコウ「どうしても触れたくない」

「どうしても触れたくない」は『Craft』31号から36号(2007年～2008年)に連載されたヨネダコウの商業出版デビュー作である。同作のほかに書下ろしのスピンオフ作品、後日談的作品など三編を収めたコミック『どうしても触れたくない』は、2008年9月15日初版発行となっている。それにも関わらず2008年9月発売の作品までを対象にしたBLランキングでは3位を獲得して

おり、人気の高さを伺い知ることができる。2014年に実写版映画が公開されるのに合わせて、物語の脇役であった小野田に焦点をあてた『それでもやさしい恋をする』が発売され、さらに映画のDVDにもスピノフが特典として同封されたほか、2017年に発売されたヨネダのファンブック『20072017』にもスピノフが掲載されている。本稿では基本的にはコミック版を中心に言及するが、必要に応じてスピノフなどにも言及する。

さてコミック版の紹介文は以下の通りである。

…なんか変なコトしたくなるよ、お前…
新しい職場に初めて出社した日、
嶋はエレベーターで二日酔いの男と一緒にいる。
それが、新しい上司・外川との出会いだった。
無遠慮で図々しいように見えて、
気遣いを忘れない外川に惹かれる嶋だが、
傷ついた過去の経験から、一步を踏み出せずにいる。
一方、忘れることのできない記憶を抱えながらも、
外川は傷つくことを恐れず、嶋を想う心を隠さない。
好きだけど、素直になれない——……
不器用な思いの行方は？（裏表紙より）

ここから明らかになるのは、外川陽介と嶋俊亜紀の関係が部下と上司であるということ、外川から嶋に対するアプローチが行われたことである。また二人には共通して暗い過去の体験と、心の傷があることも明らかとなる。前二作の紹介文のように、二人の〈攻〉〈受〉の位置関係や、社会的立場に関する言及が一切無いことから、物語のポイントがカップルを成立させることだけではなく、二人が心の傷をいかにして乗り越えるのかにあることが予想

される。

さて二人に向けられた女性の視線を見ておきたい。嶋については、「さっき総務の女のコ達が騒いでたぞー「嶋クンかわいいー キレー」って」(14)とある。また外川は、「淋しいなら ヨメさん貰ったらどーすか? モテンのに」(15)とされている。これらの発言から、二人がそれなりにもてる存在であることが分かる。また嶋に関して言うならば、美形に属するものとして設定されていることも明らかとなる。一方外川の場合、29歳という設定で、主な登場人物の中では年長であり、ある種のオヤジ扱いされていることから、キャラクター設定的には美形には属していないと言えるだろう⁽⁷⁾。

さて二人の関係性に眼を向ければ、外川が〈攻〉で嶋が〈受〉である。外川は前述の通りオヤジ的扱いを部下からされていることから、男性的な立ち位置として扱われていると言える。また嶋の場合は先の引用にもある通り、綺麗、可愛いと容姿について言及されていることから、外見的な評価や周囲から向けられる視線としては女性寄りの立ち位置に居ることが分かる。しかし、二人で居る時に食事の準備をするのは外川であり、嶋は手伝いをする程度である。ジェンダー役割の視点を含めて考えるならば、二人の性別的な立ち位置は決して男性的、女性的という言葉ではまとめられないことになる。

また嶋の前の会社である TAG について、「またでかいとこ いたんだなー クビ!？」(17)とされていることから、外川と嶋が勤務する会社が決して大手ではないことが分かる。二人の職場が中堅規模の会社ということから考えれば、外川は突出して裕福であるわけではなく、二人の間にある社会的な権力関係は、単純な上司と部下の間にある程度のものに過ぎず、圧倒的なものとは言えないだろう。

これらの点から「どうしても触れたくない」は、BLの王道設定を多く引き継ぐ物語で、BLの典型とは多少異なる程度の物語であることが分かる。しかしそれでもこの物語は、進化系 BL として分類されるべきである。ゲイ

であることによって傷つけられた嶋。そして母親に捨てられたという経験から心に傷を負う外川。この二人の心の変化に焦点を当てた物語だからである。そのため前述の紹介文は、二人の社会的な地位や外見の観点から記されるのではなく、心的な側面に焦点が当てられて記されていたのである。

さて嶋のキャラクターには、王道 BL の〈受〉としての性格を忠実に引き継いでいる点がある。

嶋：勘違いされちゃ困るんで言っときますけど そういうわけで俺
ノンケにはもう懲りてるんで

外川：へーっ その割には理性が緩いことで

嶋：……

外川：あーっ まあしゃーないわなーっ お互い様なっ (45)

これは嶋が初めて外川との肉体関係を持った後の会話である。この時、嶋にとって外川は気になる存在になりつつあるものの、二人の恋愛関係が成立はしていない時期である。嶋は、流れに身を任せて外川と肉体関係を持ってしまったことになる。そしてこの後も嶋は、二人の関係を明確にしないまま外川との関係を続けることになる。女性から「可愛い」「綺麗」と言われる美貌と、大手企業に勤めたり再就職においては有利になったりするほどの才能を持ち合わせ、そして過去の経験から「ノンケには懲りている」と言いながらも欲望に流されやすいという、〈受〉としての王道設定を嶋は引き継いでいたのである。

さて「どうしても触れたくない」のスピノフである『それでもやさしい恋をする』までを一連の作品とするならば、『それでもやさしい恋をする』はまさに進化系 BL である。主要な登場人物は、出口晴海（31歳）と小野寺良（28歳）である。また出口は大手企業勤務である一方で、小野寺は中堅企

業勤務である。このように考えると、年齢や社会的なステータスは出口の方が上である。さらに積極的にアプローチをかけるのも出口であった。一方小野寺は世話好きという女性性と関連づけられる特性が与えられている。このような設定から考えるのであれば、この物語が王道 BL であるならば〈攻〉出口、〈受〉小野寺となるはずだ。しかし実際の二人の関係は、〈攻〉小野寺、〈受〉出口という、関係になっている。

『それでもやさしい恋をする』はまた、「どうしても触れたくない」と同様、心的な変化を丁寧に描き出した物語でもある。例えば、出口が小野田に告白した後、その返事を得るまでの出口の不安を描き出した場面は、臨場感に溢れている。この場面では、単に告白の返事を待つという不安だけではなく、失恋を知ったからこそその告白であったことに対する出口の自己嫌悪、もともと異性愛である小野寺から見下され、軽蔑されるのではないかという出口の複雑な心境が、丁寧に表現されているのだ。

このように考えると、ヨネダの一連の作品が進化系 BL であるのは、王道の設定に変化をもたらしているからではなく、心的な変化を丁寧に描いているためであると言えるだろう⁽⁸⁾。

Ⅳ. ボーイズラブに見るジェンダー構造

さてここまで、BL の三作品における主要登場人物のキャラクターと、それぞれの作品のカテゴリーについて概観してきた。ここからは、これらの作品をフェミニズム的な視点から分析することの意義や、それにより何が明らかになるのかを考察する。

1. 強制的異性愛からの逃避

女性の欲望や衝動を少年に託して描いた24年組の〈少年愛漫画〉、そして

一次創作では描かれていない空白を妄想によって埋める〈やおい〉を源流とするのがBLだった。つまり女性が女性のために創作するBLとは、女性の欲望や妄想を表現したものである。しかし24年組が登場した70年代の表現規制に比べれば、相当程度性表現に寛容になった現代においてもなお、女性たちは自らの性的衝動を描くために、男性間の性愛を選択する必要があるのだろうか。その答えは、文化や政治制度の問題にあると言えるだろう。

少子高齢化の対策を主要な政策課題と位置づけ、女性に働きつつ子どもを産み育てることを強要する今日の政府や文化的な抑圧からも明らかなように、女性が子どもを産むことは社会を存続させるためには不可欠である。その一方で医療技術が発達した今日の社会でさえ、出産は女性に多大な負担を負わせることであり、女性抜きには不可能である。つまり社会を維持するためには、女性が恋愛に関心を持ち、結婚し、そして出産するように仕向けなければならないのである。さらに、女性が自ら出産する役割を引き受けることは、女性が自ら育児を引き受けることと同義であるかのように見做され、出産や育児は結果的に男性の女性支配を存続させる装置となるのである。このような社会の規範をアドリエンヌ・リッチは強制的異性愛と呼び、これが「一つの政治的制度」(67)であるとした。

つまり男女間の性愛を含む恋愛を描くことは、この強制的異性愛へ女性を導くことにつながるのだと言える。竹宮は「男女の恋愛って、結婚や家族が絡んできますよね。そういうものをそぎ落として、相手を愛する苦しさや価値観の違いによる溝を真剣に考えられる」(2015年2月3日)のために、〈少年愛漫画〉という表現形態を選んだと語っている。つまり、恋愛や性愛がそのまま結婚や出産、家族の形成につながることはない、あるいはそれらを連想させることのない恋愛の形態として、男性同士の恋愛が選ばれたのである。そしてこのような意識は、BLの読者にも引き継がれている。BL愛読者の女性は、「男女の恋愛だと、肉体的欲望とか結婚願望とか、ピュアじゃない

ドロドロしたものがつきまってしまう。でもボーイズ・ラブだと精神的な絆があって、それからフィジカルな方へ行くので、読んでいて安心なんです」(「ボーイズ・ラブ」漫画を読む女)と語っている。

さらに進化系BLでは、強制的異性愛システムに馴染むことのできない人たちの心情をも代弁することもある。「どうしても触れたくない」の嶋は、ゲイであることに自覚的である。彼が思いを寄せる外川は、子どもを持つことに憧れを抱いている。嶋は外川に自分の想いを吐露する。

嶋：重いじゃないですか そういうの 俺、男だし 当然だけど 子供とか産めないし

外川：そんなモンはな お前ともし出会わなくても 簡単に掃いて捨てられる程度の憧れだ

嶋：…捨てられないですよ 絶対に 過去はどうやっても捨てられない
(146-148)

この嶋の言葉は、彼自身がゲイであるための言葉である。しかし強制的異性愛が発動している社会においては、子どもを産めない、あるいは産まないこと選択した女性の心情とも重なる。嶋の吐露は男性の姿に託した女性の本音の吐露なのだとも言えるだろう。そして「どうしても触れたくない」というBLは、ジェンダー規範に基づく社会や文化的な価値観へ挑戦しているのだ。

2. ジェンダー構造に基づく関係性

BLは男性同士の恋愛を描き、男性同性愛の存在を顕在化させているため、異性愛を当然とするジェンダー構造に挑戦していると一面的には言える。しかしそれぞれの人間関係をつぶさに分析するならば、ジェンダー構造に挑戦

しているわけではなく、むしろ積極的にジェンダー構造を利用している側面があることも明らかになる。

「高嶺のドクターの知られざる素顔」の池内は、〈受〉という役割を担わされているが、彼は「世話好き男子」であり、金はあるが身の回りの世話を出来ない岡安の世話を甲斐甲斐しく行っている。岡安は池内と出会う以前は、ハウスキーパーを雇っていたわけだが、それらを全て池内に背負わせるのである。それもほぼ住み込みで、マッサージ師や目覚まし時計の代わりにさえている始末だ。

またこのような関係性の成立については、

池内：あの 今さらですけど… どうして オレなんですか？

ほら ハウスキーパーさんだったのに…

岡安：——イキイキして見えたから 患者さんが奈々夫くんが いいって
いう 理由がわかるよ

池内：そんな風に思われてたなんて なんか嬉しいな——… (19-20)

岡安：——なにも 言わずに聞いて ダメなんだ お前がいないと 部屋は
散らかるし メシはまずいし …それよりも あれから 気になって
寝られなかった

池内：先生が オレを——… (31-32)

といったやり取りから分かるように、身の回りを世話をさせることを恋愛の名のもとに正当化し、それを女性性を有する〈受〉に押し付けることを美談であるかのようにしてしまっているのである。まさに岡安と池内の関係はジェンダー構造に基づいているのであり、本来そのような関係性から自由であることを目指して選択されたはずの男性間の恋愛関係が、男女間の恋愛関係

の模倣になってしまっていると言える。

また「どっちもどっち」の尾崎は、自身がゲイと見做されることを頑なに拒絶する。

円谷：…あなた ゲイなんですか？

尾崎：違うね 僕は美しいモノは何でも好きなのさ そうだな あえていうならバイかな (13)

円谷：そうですね 尾崎さん ゲイですもんね

尾崎：オイ!! 違うぞ!! バイだオレは 勘違いすんな (41)

尾崎がゲイではなくバイセクシュアルであることを強調するのは、女性を愛することができることを示すためであり、強制的異性愛の社会における子孫を残すという責任を果たす能力があることを誇示するためだと考えられる。つまり今日の強制的異性愛とそれを支えるジェンダー体制において、異性愛への道を閉ざされることに対する尾崎の恐怖を示しているのだ。最終的に尾崎は円谷との恋愛関係を成就させることになるので、尾崎が同性愛に対する差別意識を有していると単純に言うことはできない。しかしそれでも今日の社会においてゲイという烙印を押されることと、それに伴うリスクは大きいと考えていると言えるだろう。それ故に二人は、二人の関係が明るみにならないよう注意しなければならないのである。

「どうしても触れたくない」でも同じように同性愛嫌悪が描かれる。嶋が転職をするのは、同僚の男性と付き合っていたことがばれてしまい、それを必死に隠そうとして元彼が嶋に対する執拗ないじめを仕掛けたためであった。そのような中、元彼は嶋に対して「嶋…っ 俺のこと嫌いになるなよ…っ 頼むよっ 好きなんだよ…っ」(59)「…お前のこと好きなのに 男のお前を好き

「自分が嫌なんだよ」(69、強調点引用者)と話す。

この元彼の行為は、同性愛嫌悪が蔓延する社会において、ゲイという社会的な烙印を押されることからの逃避だと考えれば、尾崎の言動と大差がないようにも思われる。しかしコメディな作風で描かれる尾崎の言動と、シリアスな作風で描かれる元彼の発言とでは、読者に与える印象はまったく異なったものになる。尾崎の場合、ゲイとみなされることの拒否であるが、元彼の場合、ゲイとみなされることの拒否だけではなく、ゲイである(あるいは少なくとも男を好きになる可能性がある)自分自身を受け入れることが出来ないことに対する自己嫌悪も含んでいるのである。さらに両者を直接的に比較すると、尾崎のゲイと見做されることへの恐怖があまりにも露骨であり、滑稽に感じられさえする。

尾崎はバイセクシュアルであることを強調し、そして元彼は女性と付き合うことによって、女性を好きになることが出来ることを示し、自身がゲイではないことを証明しようとしている。彼らの行為が明るみにするのは、男同士の絆を維持するために女性を利用する女性嫌悪の存在でもある。BLでは、ジェンダー構造を利用しながら男性同士の恋愛を描きつつ、ジェンダー構造を維持する女性や性的マイノリティを抑圧し、排除する社会や文化的な制度に対する批判的な視線を提示してもいるのである⁹⁾。

3. 「個人的なことは政治的なこと」

多くの女性たちは長い間、自分が抱えている問題は個人的な問題であって社会や政治の構造的な問題ではないと思い込み、沈黙させられてきた。しかし実際にはそのような問題の多くは、個人的な問題ではなく広く女性たちが共有していた問題であった。この事実を端的に宣言したのは、ラディカル・フェミニズム、あるいは第二波フェミニズムがスローガンとして掲げた「個人的なことは政治的なこと」である。さらにこのスローガンを解釈すれば、

個人的な性的関係性において生じる権力関係が、政治的社会的な権力関係を規定すると読むことも可能である。そしてこの事実をBLは暴くのである。

王道BLにおいては、〈攻〉は男性性、〈受〉は女性性のメタファーを用いてキャラクターが設定されている。つまり性行為における能動性が男性性を意味し、受動性が女性性を意味するように設定されているのである。「高嶺のドクターの知られざる素顔」の池内は、まさに家事労働を担うという女性役割が課されている。また「どうしても触れたくない」の場合、料理などの家事を主に行っているのが外川であるにも関わらず、外川は「お前は理解ある良い嫁になるよ 嶋っ 俺が保証する」と言って、〈受〉である嶋を女性的に扱おうとしていることが読み取れる。

「どっちもどっち」の場合、物語は尾崎と円谷の〈攻〉のプライドをかけた闘いとして進展する。しかしこれは連載当初の設定であって、話の展開を追っていくとどうやら〈攻〉尾崎、〈受〉円谷という関係性に落ち着きつつあるようである。(もちろん円谷の反撃もあるのだが。)さてこのような現在の状況を確認したうえで、二人のプロフィールを再度確認しておくと、尾崎は「スポーツ界で 数知れない程の賞を 総ナメにし その眩しい肉体美」と説明され、円谷は、「話せない言葉などなく ピアノ、バイオリン その他聞いたこともない 楽器も操り放題」と説明されている。つまり円谷には文、尾崎には武のイメージが割り振られていることになる。これはまさに円谷には女性イメージを用い、尾崎は男性イメージを用いて冒頭から語られていたことになるのだ。そしてこの設定に従って、二人の性的な関係性における〈攻〉を巡る攻防は、次第に尾崎が優位となるのだ。

さらにこの〈攻〉尾崎、〈受〉円谷という構造が定着しつつあることが明らかになってくる頃には、料理が出来ない円谷が尾崎のために料理を練習する場面すら描かれることになる。また尾崎と円谷がそれぞれ病気で倒れる話が描かれているが、円谷が尾崎を甲斐甲斐しく看病しようとしていたのに対

し、尾崎は汗をかき紅潮して倒れている円谷に欲情し、看病ではなく寝込みを襲おうとする始末でもあった。このように考えると、〈攻〉のプライドをかけた闘いとして始まった「どっちもどっち」であったが、ジェンダーイメージに基づくキャラクター設定の段階で勝負は見えていたのであり、その勝負に決着がつきそうになると、〈受〉である円谷の女性化がさらに進んでいると解釈することが出来る。

BLは登場人物の社会的地位などの設定によって〈攻〉〈受〉という関係性が構築される構造と、〈攻〉〈受〉の関係性が確定することによってジェンダー役割が課されるという構造を暴くのである。そして政治的なことが個人的なことに影響を与えるだけではなく、「個人的なことは政治的なこと」でもあると喝破し、1960年代に女性たちが掲げたスローガンが正しかったことを示しているのである。

また尾崎と円谷の闘いが、プライドをかけた闘いとなるのは、〈受〉になることが単に女性化され、女性として劣位に追いやられることを意味するからだけではない。フェミニズムでは、性関係において受動的な立場に追いやられることは、身体を他者によって征服されることを意味していることを明らかにした。戦地で頻発する戦地強かんや、民族浄化と呼ばれる問題は、その最たる例だと言えるだろう。つまり尾崎にとっても円谷にとっても、〈受〉になることは征服されることであり、男社会においてエリートとして有していた権力を削ぎ取られることを意味するのだ。BLは性による支配、性による侵略という暴力構造の問題をも炙り出しているのだ。

ま と め

ここまでBLの源流と、具体的な作品に基づきながらBLの意味を探ってきた。これらの分析を通じて明らかになったのは、BLとはジェンダー構造

に収まりきらない女性の欲望や妄想を表現する手段であったこと、そしてBLがジェンダー構造を利用しながらジェンダー構造を攪乱し得る機能を持っていることだった。またさらに、女性学やフェミニズムがこれまで取り組んできた性による女性支配などの問題意識の多くが、BLにおける〈攻〉と〈受〉とのより良い関係性の構築を模索する取り組みの中で可視化されていることであった。

本稿のまとめとして、男性がBLを読むことの意味を考察しておきたい。『ダ・ヴィンチ』に掲載された「男のためのBL てほどき」においてサンキュータツオは、「僕の恋愛対象は男性ではないのですが…」という質問に対して「読者のジェンダーは問わず楽しめます。ロボットがある世界や魔法がある世界と同じように「男同士の恋愛がある世界」として、読んでみましょう」と答えている。確かに読書の勧めと考えるのであれば、あるいは男性のBL作家が登場し、一般的な存在になっているならば、その通りなのかもしれない。しかし本稿で考察したように、BLの根底にあるのは、ジェンダー構造によって抑圧された女性の欲望だった。そしてその抑圧構造を維持する側の男性が、「そんな世界もあるんだ」程度の意識で読むのであれば、BLを巡る女性たちの闘いは不毛な努力となり、BLを通じて発せられた女性たちのメッセージの力は半減させられてしまうだろう。

「そんな世界」としてではなく、作者である女性たちの意図を理解しつつ、そこに刻まれた作者や読者としての女性の欲望を読み解きながらBLを楽しむ姿勢が男性には求められるのではないだろうか。そして他者を支配しようとする欲望を漲らせ、力関係を意識しながらでなければ人間関係を構築することが出来ず、より優位な立場にしがみ付こうとする男性ジェンダーの滑稽さを楽しみながら、自分より下位の存在を見つけ出し支配しようとすることで維持されるジェンダー構造を攪乱させることが大事なのである。女性の欲望が作り上げた文化現象に男性が参入するためには、文化の略奪者にならな

いよう留意しながら、文化の共有者を目指す姿勢が必要なのだ。

BLという現象が可視化されることは、男性というジェンダーに揺らぎを生じさせることにつながる。これまで男性はヌードに視線を向ける主体であり、視線が向けられる客体であるとは考えてこなかった。さらに男性はこれまで、性的に他者を征服するのであって、自身の身体が性的な征服の対象になるなどとは考えてこなかった。しかしBLは西村が指摘している通り、男性のヌードが他者の視線にさらされる可能性を示し、さらには肛門という穴を有する男性もまた挿入される側となることを示し(215)、征服の対象となり得ることを示しているのである。まさに男性の身体に対する感覚は、BLによって大きく変容を遂げようとしているのだ。

BLは異性愛男性を頂点とするジェンダー構造を破壊し得る力を内在している。しかしそれは偶然の産物などではない。溝口が言及する通り、BLを巡る女性たちは家父長制の抑圧から逃れて楽しむための空間をBLとして創造してきたのである(『BL進化論』2015年、55)。特に進化系BLは、同性愛嫌悪や女性嫌悪、強制的異性愛などの抑圧構造のないユートピアを描くことでそれらを乗り越えようとするのではなく、現実としてそれらが存在する社会における〈攻〉と〈受〉の物語として、それらを乗り越える方法を探り続けているのである。その結果、多様な関係性描かれ、多様な可能性が示されているのだ。BLとは女性学やフェミニズムの実践である⁽¹⁰⁾ことを男性は理解し、異性愛の男性を頂点としたジェンダーによる支配システムに投げかけられた女性からのメッセージとしてBLを理解する必要があるだろう。

〈註〉

(1) 高橋陽一によるサッカー漫画。1981年、週刊少年ジャンプで連載が開始され、83年にはTVアニメ化されている。週刊少年ジャンプに連載されたのは88年までだったが、その後も連載誌を変えながら作品は続いている。連載開始当初、主人公の大空翼など主要登場人物は小学生であったが、現在連載されている『キャプテン翼ライジングサン』では、主要登場人物たちが国内外のプロリーグで活躍する様子が描かれている。

(2) 〈攻〉とは性行為において挿入する側、〈受〉は挿入される側を意味する。また×はカップルの組み合わせを示す記号であり、×の前が〈攻〉、後ろが〈受〉を示している。

(3) 例えば、高永ひなこ『恋する暴君』(2005年～、後輩×先輩)、緑山ヨウコ『ヘンタイ教師と生意気ヤンキー 指導の心得』(2011年、生徒×教師)、ヨネダコウ『囁く鳥は羽ばたかない』(2013年～、舎弟×若頭)、桜日梯子『抱かれたい男1位に脅されています。』(2014年～、芸能界の後輩×先輩)などがある。

(4) インターネット技術や電子書籍などの普及によってより多くの読者が手軽にBLを手にするできるようになり、広範に流通することが可能になった。また手軽に作品を発表できる媒体が登場することにより、より多くの作家が作品を発表できるようになった。その結果として、BLの進化が加速するという効果もたらされたと言えるのだ。

(5) メディアミックスは、進化系BL以前からもなされていた。例えばBLの黎明作品とした尾崎南の『絶愛—1989—』は、特典としてOVAが作成され、ドラマCDも作成されている。また主人公の一人である南条晃司が歌手であることから音楽CDも作成されたほか、ノベライズや、外国語への翻訳もされている。このことはBLがその黎明期からメディアミックス展開を行っていたことを示すが、別の視点から考えれば、『絶愛—1989—』の成功が、その後のBLのメディアミックス展開を決定づけたとも言える。

しかしメディアミックス展開がより活発になるのは進化系BLの時代になってからである。『はじめての人のためのBLガイド』のまとめによると、1987年から2000年までの間に映像化された作品が20作品であるのに対し、2001年から2015年の期間では86作品となっている。このような活発な展開が、BLへの関心を高め、また新たなファン層の獲得につながっている。例えば映画化されれば、BL読者以外にも、起用された俳優のファンもまた視聴者となり、新たなBL読者の獲得が期待できるのだ。『どうしても触れたくない』は2014年に実写映画化された。撮影日数5日の低予算の作品で、単館上映で封切られた。しかし連日満員が続き、上映期間延長を繰り返したほか、上映地域が拡大され、海外でも上映された。さらにはDVDが発

売された後、リバイバル上映もなされている。また映画化するレーベルも多様で、公開上映を目的として映画化される場合もあれば、『高嶺のドクターの知られざる素顔』のように、女性向けアダルトビデオ制作会社が実写化する場合もあり、これもまた新たな層のBL読者獲得につながっていると言える。

このようなメディアミックス展開が今日のBL現象を支える原動力の一つとなっていると言えるだろう。

(6) 実写版『どっちもどっち』では、尾崎が円谷に恋愛感情を抱いていることに気づいた後、エプロン姿の円谷に世話を焼かれる夢を見る場面が挿入されている。この場面は、尾崎が恋愛対象としての円谷を女性化していることを示している。しかし原作にこのような場面は描かれていない。つまりこの場面は、映画を制作した監督、あるいは脚本家による創作ということになる。

原作を映画化するにあたっては、演出などの問題から原作にない場面を創作したり、あるいは原作の一部を削除したりすることは多々行われている。ここで着目しなければならないのは、「どっちもどっち」の読者の一人である監督、あるいは脚本家が、〈受〉と見做される側に女性的な役割やイメージを読み解いているという事実である。

また映画版『どうしても触れたくない』のメイキングビデオのインタビューの中で、外川役を演じた谷口賢志は、〈攻〉役の谷口は男性としてスタッフから適当に扱われていたのに対して、〈受〉の嶋を演じた米原幸祐は「大女優」のように扱われていたことを指摘している。米原自身も原作には描かれていないような「女心」を感じながら役を演じたと述べている。さらに実写版『高嶺のドクターの知られざる素顔』撮影後のインタビューで監督が、〈受〉の池内役を演じた真澄かおるを「可愛い」と形容し、逆に〈攻〉の岡安役を演じた岡田ケントが自身を「可愛い」と表現したのを訂正させている。

映画制作に関わるスタッフをBLの読者と想定するなら、これらの事実は〈受〉を女性化する視線が読者に共有されていることを示していると言えるだろう。

(7) 映画版『どうしても触れたくない』で外川役を演じた谷口賢志は、役作りをするにあたり、鍛えられた身体はビール好きの外川のイメージとは異なると思い、あえて撮影の前には弁当を食べるなどして腹が出るようにしたことを試写会のトークイベントで紹介している。(特典DVDより)

(8) 1992年5月、『CHOISIR』第20号に佐藤雅樹による「ヤオイなんて死んでしまえばいい」というエッセイが掲載された*。内容はゲイ男性の視点からの〈やおい〉批判である。これを発端にやおい論争が始まった。論争そのものを丁寧に追うことは出来ないが、ごく簡単に佐藤の論点をまとめるなら、〈やおい〉は男同士のセックスを描いているにも関わらず、そこに描かれているのは空想のゲイでしか

なく、現実のゲイを不可視にするものであってゲイ差別である、ということになるだろう。佐藤による批判が妥当なものなのか否かについての議論は別にして、確かに〈少年愛漫画〉にしても、〈やおい〉にしても、そしてBLにしても、その執筆動機は女性の抑圧された衝動や妄想を描くことであつたのだから、そこで描かれるのは空想でしかないとの指摘は的を射ていると言えるだろう。このような批判的な視点が、「どうしても触れたくない」のようなゲイ男性の心的苦悩を丁寧に描く進化系BLの背景にあつたのだ。王道のBL物語の設定を極端に逸脱していないにも関わらず、この作品が進化系BLに位置づけることが可能なのは、女性の苦悩や欲望だけではなく更なる他者の苦悩をも描きだしているからである。

*やおい論争はミニコミ誌上で行われたため、現在その全文を追うことは困難である。佐藤の論考について本稿では、溝口『BL進化論』(101-105頁)に転載されたものを参照した。

(9) 本稿で取り上げた三作品は、いずれもゲイフレンドリーな雰囲気醸成している。異性愛であつた岡安であるが、アメリカでの生活経験からゲイに対する偏見がないことが、その後のエピソードとして語られる。尾崎と円谷の場合、二人の交際がばれた時も周囲は当然のこととしてその事実を受け入れている。嶋はゲイであるためにTAGを辞めなければならなかったが、再就職した会社では外川との関係を温かく見守る小野田が居て、嶋はその会社を辞めたくないとさえ言っている。またその小野田は、嶋との出会いによってゲイに理解を示し、最終的には出口と交際始める。また嶋の元彼の場合、『それでも、やさしい恋をする』では、会社という公的な場を離れたランチタイムという私的空間において、嶋のその後について気遣う様子が描かれている。

TAGと嶋たちの会社を比較した時、TAGの社員は皆スーツ姿であるのに対し、嶋たちの会社では社員の多くが私服であることは象徴的である。スーツは社会性や働く男性の象徴と言えるが、スーツ姿の社員の数はその会社が社会的権威をどれだけ重視しているのかを示していると言える。TAGと嶋の会社におけるゲイフレンドリー度の対比は、会社と社会的権威との距離によってゲイフレンドリー度が規定されていることを象徴的に示しているようだ。つまりホモソーシャルな権威と会社の距離が近ければ同性愛嫌悪がより強くなり、距離が遠ければゲイフレンドリー度がより高くなるのだ。

(10) ヨネダがインタビューで示している通り、おそらく作者や読者の多くはBLが女性学やフェミニズムの実践的行為であると考えてはいないだろう。しかし誕生の経緯、描かれた内容の変化、またその意味付けを詳細に考察するなら、作者たちの意図とは関係なく、女性学やフェミニズムの実践と位置づける、あるいは見做すことができるという意味である。ヨネダは次のように語っている。

溝口：矢代が男相手に「公衆便所」状態で、矢代を愛する「攻」の百日鬼がインポだっという『囁く〜』は、「仮性ホモ」である家父長たちへの痛烈な批判としても機能していて、BLが「発明」されなければならなかった背景へ切り込むメタな次元を持っている（略）。

ヨネダ：メタな次元っていうのは意識していなかったのですが、指摘されてなるほどそうだったか、と思いました（笑）。そこまで大それたものは自分の中にはないのですが、漠然と頭の中にあって、掴めないけどたしかにそこにあるテーマみたいなのはあります。言葉にしたり活字にするとなくなってしまいそうなものなのでそこは漫画で表現できたらいいのですが。（溝口『BL 進化論〔対話篇〕』32）

女性学やフェミニズムの実践においては、本人の主体的な意思による実践も大切であるが、本人の意思とは関係なく、その実践の結果として何をもたらすのかも大切なのである。

参考引用文献

〈作品〉

大魚 YUKKA 『高嶺のドクターの知られざる素顔』 オークラ出版、2012年
——原作『高嶺のドクターの知られざる素顔』DVD（監督：RAIN、製作：Addiction、2013年）

柊のぞむ 『どっちもどっち』 海王社、2011年～（現在第6巻まで刊行中）
——原作『どっちもどっち』DVD（監督：野村佐紀子、製作：Love Place、2014年）

ヨネダコウ 『どうしても触れたくない』 大洋図書、2008年
——『囁く鳥は羽ばたかない』 大洋図書、2013年～（現在第45巻まで刊行中）
——『それでもやさしい恋をする』 大洋図書、2014年
——『20072017』 大洋図書、2017年
——原作『どうしても触れたくない』DVD（監督：天野千尋、製作：ポニーキャニオン、2014年）

『メイキングオブ『どうしても触れたくない』：想いが触れる瞬間』DVD（ポニーキャニオン、2014年）

〈先行研究〉

アドリアンス・リッチ（大島かおり訳）『血、パン、詩。』（1986）晶文社、1989年
東園子 『宝塚・やおい、愛の読み替え：女性とポップカルチャーの社会学』新曜社、2015年

- 石田美紀『密やかな教育：〈やおい・ボーイズラブ〉前史』洛北出版、2008年
勝山俊光編『はじめての人のためのBLガイド』玄光社、2015年
サンキュータツオ、春日太一『俺たちのBL論』河出書房新社、2016年
竹宮恵子「人生の贈りもの①「風ときの詩」実は少女の内面世界」『朝日新聞』
(2015年1月5日夕刊5面、東京)
——「少年愛で描く恋愛の精髓」『朝日新聞』(2015年2月3日朝刊26面、福岡)
西村マリ『BLカルチャー論：ボーイズラブがわかる本』青弓社、2015年
堀あきこ『欲望のコード：マンガにみるセクシュアリティの男女差』臨川書店、2009
年
溝口彰子『BL進化論：ボーイズラブが社会を動かす』太田出版、2015年
——『BL進化論〔対話篇〕：ボーイズラブが生まれる場所』宙出版、2017年
「そろそろ楽しんでいいですか？ 男のためのBL」『ダ・ヴィンチ』(2017年3月)：
180-203頁
「「ボーイズ・ラブ」漫画を読む女 男同士の愛は安心する」『AERA』(2000年3月
6日)(<http://database.asahi.com/library2/main/top.php>)
『美術手帖：特集 ボーイズラブ』(2014年12月号)
『ユリイカ：総特集 腐女子マンガ体系』(2007年6月臨時増刊号)
『ユリイカ：特集 BLオン・ザ・ラン』(2011年12月号)